

令和6年度 第103回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

「正智深谷8年ぶり4度目の優勝」

報告者：高体連技術委員 細田学園高校 上田 健爾

1. 大会概要

2024年10月13日から2024年11月17日にかけて、シード校インターハイ予選ベスト8校（昌平高校・西武台高校・正智深谷高校・浦和学院高校・細田学園高校・浦和東高校・立教新座高校・浦和南高校）とSリーグ参加校15校、さらに一次予選突破校31校を加え計54校による、ノックアウト方式のトーナメントで40分ハーフ、延長20分、決着が付かない場合はPK方式で勝者を定めるルールで行われた。

1回戦から熱い試合が繰り広げられ、最終的には優勝正智深谷高校、準優勝浦和学院高校、3位西武台高校、聖望学園高校という結果で幕を閉じた。

2. 大会傾向

51年ぶりにインターハイチャンピオンが存在する今大会。どのチームも否応でもここを意識し、戦術、ゲーム運び、チーム作りをしてきたことであろう。それもあってか、今大会の傾向として、以下の2点を上げる。

1点目はセットプレーの得点率が高かったこと。準々決勝から決勝までの7試合で生まれた得点は計16得点。そのうちの11得点がセットプレーからの得点であったことは今大会の大きな特徴の1つである。特に準決勝・決勝のゴールはすべてコーナーキックからの得点であった。

2点目は強度の高いチームが勝ち上がったこと。優勝した正智深谷を筆頭に、聖望学園や西武台のように強度を追求し、個々のフィジカルが高く、守備力があるチームが勝ち上がったことも今大会の特徴である。昨年の準決勝以降の総得点数30と比較しても約半分になっており、強固な守備をベースに戦ったチームが勝ち上がったと裏付けられる。

個々が対人プレーで負けず、グループでも強固な守備を構築し、相手の良さを消し、僅差の試合に持ち込む。拮抗したゲームの中で、セットプレーを獲得し、仕留める。このようなプランが成功し、【得点減少】【セットプレーの得点率上昇】となったと考えられる。

3. 決勝進出高校分析

優勝校 正智深谷高校

基本陣形は1-4-2-3-1を採用する。相手や展開に応じて3バックに変更した試合もあった。守備では、個々の対応の良さやチャレンジ&カバーのような個人戦術が徹底されていると共に、ラインコントロールやスライドによってコンパクトな守備陣形を構築されており強固な守備が作られていた。個人では、中盤のMF⑤大和田とMF⑥吉田のダブルボランチが豊富な運動量と鋭い予測で広範囲にスペースを守ることで相手の前進を許さない。そして、サイドで相手がドリブルでチャンスを作ろうと試みるもSB②外山の粘り強い対人

プレーで相手にオープンチャンスは作らせない。また、①GK 森の守備範囲の広さ、判断の良さはチームの失点を減らす大きな要因の1つとなっていた。スペースをうまく管理し、クロス対応やブレイクアウェーで相手に攻撃のチャンスを与えない守備は大会屈指の能力であった。

攻撃では、SB⑭鹿倉の左足から繰り出される高精度なフィードを中心にボールを前線や逆サイドに展開し、相手を揺さぶり押し込む。そのフィードから生まれたスペースでMF⑩近藤が前向きを作りチャンスを演出する。MF⑦赤川がスピードを生かした突破と、SB⑭の高精度なクロスボールで両サイドからオープンチャンスを作る。また、精度の高いキッカーが存在することもあり、セットプレーから多くの得点を生み出した。

準優勝校 浦和学院高校

基本陣形に1-3-4-3を採用している。相手の守備陣形に応じて、立ち位置を変えるポジショナルプレーで、安定したボール保持から相手を引き付け、チャンスを作り出すことがメインのスタイル。ゴールキックからGKを関わらせ、むやみにスピードを上げず、相手のプレスのベクトルやスペースを見て、再現性のある攻撃を心がける。個人としてはDF⑤秋澤の左足から出されるキックは相手に脅威を与えた。多くのチャンスメイクはFW⑩佐藤の左サイドからのドリブル突破から作り出されていた。

また、浦和学院も右利き・左利きそれぞれに高精度なキッカーを擁しているため、セットプレーから多くの得点を生み出した。

守備時には、1-5-2-3もしくは1-5-4-1で自陣に相手を引き込み、全体で連動しコンパクトな陣形を作り、ゴール前を固めてゴールから遠ざける。

ミドルエリアではブロックを作った上でFW⑨橋本のプレスを皮切りに、サイドに誘導し、ボール奪取を試みる。自陣の守備と、ミドルエリアからのプレスを使い分け、今大会1失点という堅い守備を作りあげた。

4. 終わり

シーズン最後のトーナメントという中で、各チームチーム戦術が浸透し、良いゲームを多数見ることができた。一方で、個々の強度特に守備面での強度を高め、対人プレーで相手に自由を与えない場面が多かったことは素晴らしい点であろう。

しかし、課題も見ることができた大会でもあった。セットプレーの得点率が高かったことは、逆に言えば、流れの中での得点を奪えなかったということ。強固な守備をチーム、個人で作上げてきた中で、それをこじ開ける戦術、この打開ができなかったことは今後の課題であろう。

終わりに、埼玉県代表の正智深谷高校は、埼玉県を勝ち抜いた自信を胸に、本大会で持てる力を十分に発揮し実りある大会となることを期待し総評とさせていただきます。